

## 第41回 奥羽大学歯学会例会講演抄録

(平成18年6月17日)

## 一 般 講 演

## 1) 著しい歯肉退縮に歯肉結合組織移植をおこなった1症例

○宮尾 益佳, 鈴木 史彦, 岡本 浩<sup>1</sup>  
(奥羽大・歯・歯科保存, 附属病院<sup>1</sup>)

(はじめに) 上下顎の義歯に不快感を訴える患者にブリッジを計画した。しかし, 3の歯肉退縮が著しく, その部分のプラークコントロールが常に不良であったため, 保存は困難であると考えられた。遊離歯肉の高さと幅の生理的な関係を利用した歯肉結合組織移植術を行い, プラークコントロールしやすい形態に改善し, ブリッジの支台歯として保存できた症例を報告する。

(初 診) 患 者: 52歳, 男性

初診日: 2002年6月27日

主 訴: 左下奥歯の歯肉腫脹, 義歯の不快感

既往歴: 18年前に下顎前突を外科的矯正

(診査・検査所見) 歯周組織所見: 全顎的に歯肉の発赤(+), 腫脹(+), 出血(+), 多量のプラーク付着, 3の著しい歯肉退縮。

X線所見: 全顎的に軽度~重度の骨吸収像と歯石様不透過像がみられる。6近心根は歯根破折が疑われる。

(治療経過) 徹底的なプラークコントロールの後, 1の抜歯と義歯の増歯をした。再評価後, BOP(+), 4mm以上の部位にSRPをおこなった。その後6をD根のみ残し, 5と6Mを抜歯し, 義歯を増歯した。上顎6⑤4③②1 | 1 2 3 ④ 5 ⑥プロビジョナルブリッジと下顎暫間義歯にて経過観察した。1年後上顎ブリッジを装着した。下顎は最終的に義歯予定であったが, 患者に上顎のようなブリッジにできないか相談される。抜歯予定であった3に歯肉結合組織移植術をおこない, 保

存可能な状態として4③2① | ①②③4 5 6 ⑥プロビジョナルブリッジとした。1年間経過観察した後, 下顎ブリッジを装着した。現在メンテナンス中である。

(考察・まとめ) 遊離結合組織移植術により, 露出根面を5mm被覆できた。口唇の位置関係でプラークコントロールが極めて難しい状態であったが, 術後は磨きやすい形態となり, 歯肉の健康を維持している。予後のリスク因子として術後の歯肉退縮やブリッジに加わる咬合負担が挙げられる。今後も慎重にメンテナンスを継続していく予定である。

## 2) 歯周サポート治療患者の喫煙と糖尿病について

○鈴木 史彦, 中島 大誠, 宮尾 益佳  
築館 勇樹, 塚本 康己, 池田 祥恵  
山口 英久, 中山 大輔, 岡本 浩<sup>1</sup>  
(奥羽大・歯・歯科保存, 附属病院<sup>1</sup>)

(目 的) 歯周疾患のリスクファクターは疾患の発症に関与するものと, 継続的に関与するものがある。歯周サポート治療(SPT)における継続的リスクファクターについて, 喫煙や糖尿病が口腔内のリスク項目にどのように関係するのかを詳細に分析した。

(方 法) 被験者は奥羽大学歯学部附属病院総合歯科に来院し, 歯科保存学講座歯周病学分野の医局員が担当したSPT患者205名とした。喫煙の影響は糖尿病とaggressive periodontitisを除外した178名を抽出して分析した。糖尿病の影響は喫煙者とaggressive periodontitisを除外した135名を抽出して分析した。喫煙状況は非喫煙者(NS)126名, 元喫煙者(FS)22名, 1日10本以内(S1)10名, 20本以内(S2)12名, 21本以上(S3)8名であった。糖尿病の罹患状態は非糖尿病患者(ND)126名, 糖尿病のコントロールが良好な者(D1)7名, コントロール不良だが合併症のない者(D2)1名, 合併